

母子で漂流してたどり着いた無人島 本能のままにSEXする日々

思い返せば事の始まりは何気ない一冊の旅行雑誌。軽い気持ちで手に取り、計画を立てた。それが今、こんなにも

大きな幸福

となっているだなんて。いや・・・・とんでもない。今、自分たちの身に起こっていることはとても危険で無謀で恐ろしく、幸か不幸かで言うならば明らかに不幸なことのはずなんだ・・・・。

今、僕の一番近くにいるのは紛れもなく僕をこの世に生み落してくれた実の母。

僕たちの身に何が起こっているかという・・・・。

“遭難”

安全だと確信していた旅行だった。しかし格安旅行会社が提供している海外の未開発地域の旅行、安全管理もたかが知れていたのだろう。僕たちは突如大嵐に遭遇し、転覆しそうになった船はなす術がなく最終手段の救命ボートを大海原へ放り出した。僕とママはそのボートに乗り、丸二日ほども荒れ狂う海を漂い続けたんだ。そしてたどり着いたのは、誰もいない島。俗にいう無人島というやつだ。今、僕とママはここで生活をしている。もう一年が経つが今なお助けはやってこない。いつ来るかも分からない助けを待ちながら自給自足の生活で凌ぎ、生きつないでいるんだ。

僕らは今、必死だ。生きること必死なんだ。けど、確かな喜びもある。

それはありのままの自然を謳歌できること・・・・。

ありのままの自然・・・・人間としての本能。

僕はもう二十歳だし、若くして僕を生んだママは37歳。若さという生気の最中にいた僕らに満ちていたのは“性欲”だった・・・・。

人っ子一人いない場所に若い男女二人が置かれた時、どんなことが起こるのか。それは僕らが身をもって実証したことだ。

“SEX！！”“SEX！！！”とにかく“SEX！！！！！！！”

はちゃめちゃな“SEX”の日々！！！！！！！！

動物的な、開放感あふれる“SEX！！！！！！！！”

これだけ繰り返しても足りないくらい、とにかく僕とママはそればかりだったんだ……。互いの有り余る性欲を自由に目いっぱい解放し合ったんだ……………。

ザッパア————ンッ

ザザア————ッ

ザッパア————ンッッ

打ち寄せる波。かすんだ目をぱちくりさせると強い太陽の日差し。

全身には大量の砂がついている。僕は砂浜の上に横たわっていた。

僕は一瞬困惑した後、思い出した。

「そうだった！！！」「僕らは確かボートで！！！！」

すぐさま起き上がろうとしたが、全身を強く打ち付けていたようで痛みで動きが制限される。横を向くとママが倒れていた。意識はまだないようだ。僕は全力を振り絞ってママを波が届かない場所まで引き上げた。ママは呼吸をしていた。意識がないだけのようだ。

「ハア……………ハアハアハア……………」

必死で息をしながら僕は、自分たちの身に起こったことを思い出していた。船での観光中、とんでもない嵐に巻き込まれ転覆したこと、なす術がなく、乗組員たちが救命ボートを大海原へ投げ出したこと、その救命ボートにしがみつき、長い間尋常ではない大嵐の中をママと二人で漂い続けたこと。

ただ事ではない出来事だったが幸い意識ははっきりしており、全身も打ち付けただけで目立った怪我はないようだった。そしてそれはママも同じようであった。数ヶ所青あざがあったが、大きな怪我はないようでスヤスヤと眠っている。それでも僕たちはかなりの体力を消耗していた。

夕方になりママが目覚ます。

「……………んっ？……………えっ？……………ここって……………あっ！！！！そういえば！！！！」

「ママ！！大丈夫……………！？」

「……………なんとか大丈夫みたいだけど……………ここって……………」

ママは元気そうでひとまず安心した。僕は一通り状況を説明した。

「む．．．．無人島！？」

「うん．．．．．たぶん」

周囲を半日かかって散策してみたが、人に出くわすどころか人の気配はもちろん、人がいた痕跡らしい痕跡がなかった。

「こんなところに僕たち、遭難しちゃったんだよきっと」

「．．．．．遭難．．．．．」

遠くの水平線を照らしていた太陽の残り明かりが少なくなり、周囲は留まることなく暗くなってゆく。

“遭難”．．．．．それは紛れもない事実だった．．．．．。

．．．．．。

．．．．．。

．．．．．。

人の気配なき孤島に取り残された僕らが遭遇したのは命の危機だった。しかし、根源的な危機だからこそ、対処はシンプルだった。食べ物を調達し、雨風を凌ぐ場所を確保する。そうしなければ命が危うくなるのだからシンプルであり、行動もはっきりするのだ。湧水を探し、原始的な方法で魚を採った。海水をろ過するだなんて昔どっかの本で読んだ覚えがあったが忘れてしまった。水が飲みたい、その本能にただただ突き動かされ、水を探した。食べ物についても同じことだ。とにかく僕たちは必死だった。木の実なども、毒がなさそうで食べれるものなら何でも食べた。石や木、木の葉などを組み合わせ、小さな小屋を作り、雨風に対処した．．．．．。

そして生活が何とかできるようになってきた僕たち。

すると．．．．．。

本能という人間の根源の中で並列に並び立つ、食欲、睡眠欲．．．．．

性欲。

ある時、僕はママに襲い掛かったんだ

「んはあ．．．．．んあうん．．．．．ダ．．．．．ダメよ、トモユキ．．．．．」

僕は気が付けばママの腰にしがみつき、強引に顔を吸付けてお尻をなめた後、ママのお尻にビンビンに勃起したペニスを挿入し、何度も何度も出し入れしていた・・・・・・・・！！！！

「ズチュッ！！ズチュッ！！ズチュッ！！ズチュッ！！」

「ああっ！！んああっ！！ああっ！！んああっ！！」

野生動物になった瞬間だった。

僕の理性のタガが外れたその理由はママの格好にあったのだと思う。ママの格好ったら、灼熱の南国だったのをいいことに、着てきた服なんてとうにすっぽかして腰にはっぱを巻いただけのほぼ全身が剥き出しの格好だったのだもの。何をするのに腰がフリフリ。お尻がフリフリ。僕の命の危機がわずかでも解消されたなら、すぐそこにあるのは抑えきれない性欲なのだった。

「ズチュッ！！！！パンパンパンパンパンッッッ！！！！ママアッ！！！！出しちゃうっ！！！！出しちゃうよおっっ！！！！」

「んああああっ！！！！あん！！あん！！あん！！トモユキったら・・・・・・・・んああああ！！やらしいわっ！！！！そんなんっ！！そんなんああっ！！！！あんっ！！あああんっ！！！！すごいのおおっ！！！！」

「ズビュルルルルルルルルルルルルルルルルルルルッッッッッ！！！！！！！！！！」

—閲覧ありがとうございます。ここまでの公開となります。
続きは製品をご購入ください—